

病める国の住人―梁啓超と「東亜病夫」

遊 佐 徹

1、身体思想と「東亜病夫」

昨年（2013年）にちくま学芸文庫として36年振りに再版された坂野潤治氏の『近代日本とアジア 明治・思想の実像（1977年刊行時の原タイトルは『明治・思想の実像』）』は、「脱亜論」―「アジア主義」という近代日本のアジア観を語る際に私達がともすると陥りがちな判り易い対立軸に基づく理解の枠組みに対し、双方の主張、言説の実際を検証し直すことを通じて修正を加え、近代日本の対外観、対外思想を考えるうえでの新しい視座を提示した刺激的な研究である。文庫版に付された荻部直氏の解説の一節を利用すれば、坂野氏は、「テキストの表面に見える「表現」や「言葉」の次元ではなく、その奥にある筆者の意図、すなわち「東アジア情勢の具体的認識、およびその認識にもとづく具体的に意味されている対外政策」に目を向けること」によって浮かび上がってくる「思想の実像」の追求を通して、戦後の私達の近代アジア観に強い影響力を及ぼし続けてきた先人の研究を乗り越えることに成功したのだった。

ところで、本書は、そもそも「叢書・身体思想」という全10冊のシリーズの8冊目として刊行されたものであった。従って、刊行当時、本書を手にした読者は、身体論的観点に立った明治思想史、思想文化史や日本人の身体近代の変成状況といった内容をその共通タイトルから期待したかもしれないが、その期待はよい意味で大きく裏切られることになっただろう（この点については、著者自身もその「あとがき」で、当初は「身体思想」という共通タイトルの意味が判らぬまま、執筆を引き受け、やがてそれには自分勝手な解釈を施して書き進めた、と述べているので、本書が半ば確信犯的に「身体」を無視しつつ産み出されたものであったことが判る）。文庫版を購入したかくいう私もそうであった。私は、本書を紐解くに当たって、同じ近代という時代における中国の思想に現われた「身体思想」を理解するためのヒントを見出せることを期待したのである。

私は、かねてより、近代中国の思想空間、言論空間においてしばしば「身体」の存在を前提にした議論が展開されていることに注目してきた。それは、具体的にいえば、「病める身体」としてみずから、すなわち中国や中国人を位置付ける／自覚する発想である。それを象徴し、また実際に多用された代表的表現のひとつに「東亜病夫」（「東方病人」、「亜東病夫」、また単に「病夫」、およびそれに類した熟語）がある。この一般に近代以降西洋世界が中国人に対して浴びせ掛けた侮蔑的呼称「Sick Man」に由来すると理解されてきた表現について、私はかつて著わした「近代中国の自画像」について考察した文章¹（以下、前稿と呼ぶ）のなかで、先行研究²を利用しながらそれが決して優位を誇る他者から一方的に冠せられたものではなく、当時の中国人達の側にも進んでみずから受け入れ、あるいは自称する「積極的なアプローチ」があったことを押さえたうえで、その背景、理由として、「病」に対する「医」のテーマの存在を示唆したことがあった。この「病」―「医」の関係を近代中国における「東亜病夫」の一種の流行状況に読み込むと、病気はその状態を

放置して置くならば死をもたらすものであるが適切な治療を施せばやがて回復し健康を取り戻せるとの論理に基づいて中国の再生、復活の道を見出すことが可能になる、という積極的姿勢をそこに読み取ることができることになるだろう。「東亜病夫」とは、近代の中国人にとって、他者からの規定によって現状の確認を強いられつつもそれによって現状を打開する武器ともなり得たという屈折した呼称（蔑称／自称）であった訳である。

ただし、「東亜病夫」流行に対するこの解釈が成り立つためには、本来生命科学の問題である「病」と「医」の関係が中国近代の政治思想の形成、展開においても一種のメタファーとして機能していたことについての検証、およびその使用実態の提示と分析が必要であろう。この点については、前稿がそれをメインテーマとして書き進められたものでなかったこともあって、これまで十分に論述する余裕を持ち得なかった。これが今回本稿を構想するに至った理由である。

2、梁啓超と「病」―「医」のメタファー

中国近代の政治思想において現われた「病」―「医」のメタファーの具体例として、前稿では 1899 年、すなわち戊戌政変の翌年に梁啓超が日本亡命中の自身の言論活動の拠点として創刊した雑誌『清議報』に発表した以下のような一文を取り上げた。

○「大同志学会序」 1899 年 4 月 30 日『清議報』第 13 冊

今国家之病、殆入膏肓、而内憂外患之急、其烈更甚於燎原之火也。将欲医之、将欲救之、千条万緒、千辛万苦。

この中国の現状を重病状態とみなしそこから回復、救命の困難さを語る一文は、前稿で「東亜病夫」とともにテーマ化していた別種の近代中国を代表する蔑称／自称である「睡獅」を梁が同年同冊の『清議報』で使用していたことから選択したものであるに過ぎず、実際には、彼の言説を通覧すれば、「病」―「医」のメタファーがその言論活動が開始されたとく初期から頻繁に用い続けられていたことが判る。

改めて述べるまでもなく、梁啓超は、清末中国随一の啓蒙思想家そして中国最初のジャーナリストとして、当時の思想界、言論界に絶大な影響力を及ぼし続けた人物である。その彼の残した言説に注目することによって、中国近代の政治思想における「病」―「医」のメタファーの使用状況の傾向と特徴を確認することができるだろう。以下の資料は、中国近代の政治思想の展開が中国革命同盟会の成立により新たな段階に入る 1905 年をひとつの区切りとして梁の言説におけるその使用状況を時代順に並べたものである（上に引いた「大同志学会序」も含む）。なお、使用状況の確認には以下の 4 種の著述集成を利用し、必要に応じて初出に遡った調査もおこなった。

- ・李華興、呉嘉勲編『梁啓超選集』（上海人民出版社 1984 年 上海）
- ・林志鈞主編『飲冰室合集』（中華書局 1989 年 北京〔1936 年の上海中華書局版の影印〕）
- ・『梁啓超全集』（北京出版社 1999 年 北京）
- ・夏曉虹輯『『飲冰室合集』集外文』（北京大学出版社 2005 年 北京）

また、言説の繫年に関しては、李国俊編『梁啓超著述繫年』（復旦大学出版社 1986 年

上海)を利用した。

1.『説群』序 1896年5月17日『知新報』第18冊

老病之人臟腑閼隔腠理鬆疏、則鬼崇憑之、寒暑侵之、強壯少年無患此者、体魄之相衛周也。夫治國者何獨不然。

2.「論報館有益於國事」 1896年8月9日『時務報』第1冊

去塞求通、厥道非一、而報館其導端也。無耳目、無喉舌、是曰廢疾。今夫万国並立、猶比隣也。齊州以內、猶同室也。比隣之事、而吾不知、甚乃同室所為、不相聞問、則有耳目而無耳目……。

3.「論中国積弱由於防弊」 1896年10月27日『時務報』第9冊

故語以開鐵路、必曰恐妨舟車之利也……坐此一念、百度不張、譬之忡病、自驚自怛、以廢寢食。譬之癢病、不痛不痒、僵臥床褥、以待死期、豈不異哉、豈不異哉。

4.『西学書目表』後序 1896年10月

旧学之蠹中国、猶附骨之疽、療疽甚易、而完骨為難。

5.『農会報』序 1897年4月12日『時務報』第23冊

工芸不興、而欲講商務、土產不盛、而欲振工芸、是猶割棄臂脛而養其指趾、雖有聖藥、終必潰裂。

6.「讀『日本書目志』書後」 1897年11月15日『時務報』第45冊

謹按其序曰、聖人譬之医也、医之為方、因病而發藥、若病變則方亦變矣。聖人之為治法也、隨時而立義、時移而法亦移矣。……吾中国大地之名國也、今則耗矣衰矣、以大地万国皆更新、而吾尚守旧故也、伊尹古能治病國者也、曰、用其新、去其陳、病乃不存。湯受其教、故言日新又新、積池水而不易、則臭腐興、身面不沐浴、則垢穢盈、大地無風之掃蕩改易、則万物不生、物新則壯、旧則老、新則鮮、旧則黧、新則潔、旧則敗、天之理也。

7.「保国会演說詞」 (1898年4月21日講) 1898年6月9日『知新報』第55冊

今有病者於此、家人親戚、咸謂其病不可治也、相与委而去之、始焉雖無甚病、不浹旬必死矣。今中国病外感耳、病嘔嘔耳、苟有良藥、一舉可療、而举國上下、漫然以不可治之一語、養其病而待其死亡。昔焉不知其病、猶可言也、今焉知其病而相率待死亡、是致死之由不在病而在此輩之手、昭昭然也。且靡論病之必可治也、即治之罔效、及其死也、猶有衣衾棺槨之事焉、猶有託孤寄命之事焉、欲委而去之、蓋有所不能矣。一人之身且有然、而況國之存亡、其所關係所牽率、有百倍於此者乎。故瓜分之事已見、為奴之局已成、後此者猶当有事焉矣。執豕於牢、尚狂躑而怒睥、今即數万里之沃壤、固猶未割也、數万万之貴種、固猶未繫也、而已俯首帖耳、忍氣吞身、死心塌地、束手待亡、斯真孟子所謂是自求禍也。

8.「變法通議」

論變法後安置守旧大臣之法 1899年1月22日『清議報』第4冊

編法之事、布新固急、而除旧尤急。譬猶病痞者、不去其痞、而餌以參苓、則參苓之功用、皆納受於痞之中、痞益增而死益速矣。雖然變法之事、布新固難、而除旧尤難、譬猶患附骨之疽、欲療疽則骨不完、欲護骨則疽不治。故善医旧国、必有運斤成風、聖去而鼻不傷之手段、其庶幾矣。

9.「商會議」 1899年4月1日、20日『清議報』第10冊、12冊

蓋国也者積民而成者也、積府州縣鄉埠而成者也。如人身合五官百骸而成、官骸各尽其職效其力、則膚革充盈、人道乃備。有一癘廢、若失職者、則体必不立、惟国亦然。

10.「大同志学会序」 1899年4月30日『清議報』第13冊

今国家之病、殆入膏肓、而内憂外患之急、其烈更甚於燎原之火也。將欲医之、將欲救之、千条万緒、千辛万苦。

11.「論支那宗教改革」 1899年6月28日、7月8日『清議報』第19冊、20冊

諸君、凡一国之強弱興廢、全係乎国民之智識与能力、而智識能力之進退增減、全係乎国民之思想。思想之高下通塞、全係乎国民之所習慣与所能力……泰西所以有今日之文明者、由於宗教革命、而古學復興也。蓋宗教者、鑄造国民腦質之藥料也。

12.「破壞主義」（「飲冰室自由書」） 1899年10月15日『清議報』第30冊

歐洲近世医国之國手不下數十家。吾視其方最適於今日之中國者、其惟盧梭先生之民約論乎。……嗚呼、民約論、尚其來東、東方大陸、文明之母、神靈之宮。惟今世紀、地球万国、國國自主、人人獨立、尚余此一土、以殿諸邦。此土一通、時乃大同。嗚呼、民約論兮、尚其來東、大同大同兮、時汝之功。

13.「中國積弱溯源論」 1900年4月29日～7月6日『清議報』第77冊～84冊

第一章 積弱溯源論

嗚呼、中國之弱、至今日而極矣。居今日而懵然不知中國之弱者、可謂無腦筋之人也。居今日而惘然不思救中國之弱者、可謂無血性之人也。乃或雖略知之而不察其所以致弱之原、則亦雖欲救之而不得所以為救之道、譬有患癆病、其臟腑之損失、其精血之竭蹶、已非一日、昧者不察、謂之無病。一旦受風寒暑濕之侵暴、或飲食消養之失宜、於是病象始大顯焉。……医一身且然、而況医一國者乎。

嗟乎、吾中國今日之病、願猶未久耶、吾中國今日之病、願猶未重耶。……嗟乎、吾中國今日之受病、有以異於此乎、夫病猶可也、病而不自知其病、不可為也。不自知其病、猶可為也、有告以病者、且疑而惡之、不可為也。嗚呼、吾國之受病、蓋政府与人民、各皆有罪焉。其馴致之也非一時、其釀成之也非一人、其敗壞之也非一事。……而乃蹉跎蹉跎、極於今日、夫豈無一二先覺、懷抱方術、大聲疾呼、思欲先時而拯之者、其奈舉世夢夢、昊天悠悠、非特不採其術、不聽其言、直將窘之逐之、戮之絕之、使舉國之人、無不諱疾忌医以罔苟全。……處今日危急存亡間不容髮之頃、而猶出庸医之技倆、撫拾目前一二小節、弥縫補苴、藥不對

症、一誤再誤、而終斷送我國於印度、埃及、土耳其之鄉也。故於敘述近事之前、先造此論、取中國病原之繁難而深遠者、一一論列之、疏通之、証明之、我同胞有愛國者乎、按脈論而投良藥焉。今雖瞑眩、後必有瘳、其慎勿學齊桓侯之至死不寤也。

第一章 第四節 積弱之源於近事者

總因遠因之種根雖深、然使早得人而治之、未嘗不可以奏効。即不治之而聽其自生自滅、不有以增其種焉、培其根焉、則其害猶不至如今日之甚、所最可痛者、旧病未去新病復來。日積月深、納污藏垢、馴至良醫束手、岌岌待亡。

俄國自彼得以後、日盛月強、馴至今日為世界第一雄邦。中國自康熙以後、日腐月敗、馴至今日、為世界第一病國。

14. 「十種德性相反相成義」 (1900年作) 1901年6月16日、7月6日『清議報』第82冊、84冊

其五 破壞與成立

破壞亦可謂之德乎。破壞猶藥也。藥所以治病、無病而藥則藥之害莫大、有病而藥則藥之功莫大。……今日之中國、又積數千年之沈疴、合四百兆之痼疾、盤居膏肓、命在旦夕者也、非去其病、則一切調攝滋補榮衛之術、皆無所用、故破壞之藥、遂成為今日第一之要件、遂成為今日第一美德。

15. 「論今日各國待中國之善法」 1900年8月5日、25日『清議報』第53冊、55冊
辦事者如醫病、先知其病根之所在、而以藥攻去之、病根去而元氣復。……今日中國之病根何在。即西太后黨之政府是也、我輩同志、與西后政府為仇敵、非有所私怨也。……吾觀中國之病不一、然有一總源頭、源頭維何。即守旧自大、憎惡外人之心是也。……今欲醫中國之病、惟有將此惡政府除去、而別立一好政府、則萬事俱妥矣。

16. 「新民議」 1902年11月30日『新民叢報』第21号

叙論

余為新民說、欲以探求我國民腐敗墮落之原因、而以他國所以發達進步者比較之、使國民知受病所在、以自警勵自策進、實理論之理論中最粗淺最空衍者也。

我國以開化最古聞於天下、當三千年歐西狂狃獠獠之頃、而我之文明文物、已足以彼中之中世史相埒。由於自滿自惰、墨守旧習、至今閱三千余年、而所謂家族之組織、國家之組織、村落之組織、社會之組織、乃至風俗禮節學術思想道德法律宗教一切現象、仍巋然與三千年前無異。夫此等旧組織現象、在前此進化初級時代、何嘗不為群治之大効。而烏知夫順應於昔日者、不能順應於今時、順應於本群者、不能順應於世界。馴至今日千瘡百孔、為天行大圈所淘汰、無所往而不敗矣。其所以致衰弱者、原因複雜而非一途。故所以為救治者、亦萬藥繁重而非一術。嗚呼、此豈可以專責諸一二人、專求諸一二事云爾哉。吾故今就種種方面、普事觀察、將其病根所在、爬羅剔抉、而參取今日文明國通行之事實、按諸我國歷史之遺傳、與現今之情狀、求其可行、蘄其漸進、作新民議。

17. 「答某君問法国禁止民権自由之説」 1903年2月11日『新民叢報』第25号
故医今日之中国、必先使人人知有権、人人知有自由、然後可。民約論正今日中国独一無二之良藥也。

18. 「服従釈義」 1903年5月29日、6月9日『新民叢報』第32号、33号
欧美自由之風潮、卷地滔天、絶太平洋而蕩撼亜陸、憂時愛国之士、知此固医国之聖藥、而防腐之神剂也。……然而烈藥之可以起死者、有時亦足以殺人、必調剂使適其宜、而後能全其藥之用。

19. 「政治学大家伯倫知理之学説」 1903年10月4日『新民叢報』第38号、39号合刊
盧氏之言藥也、伯氏之言粟也。痼疾既深、固非特粟之所得療、然藥能已病、亦能生病。且使藥証相反、則旧病未得豁、而新病且滋生、故用藥不可不慎也。五年以来、盧氏学説稍輸入我祖国。彼達識之士、其孳孳尽瘁以期輸入之者、非不知其說在欧洲之已成陳言也、以為是或足以起今日中国之廢疾、而欲假之作過渡也。顧其說之大受歡迎於社会之一部分者、亦既有年。而所謂達識之士、其希望之目的、未睹其因此而得達於万一。而因縁相生之病、則已漸萌芽、漸瀰漫一国中。現在、未来不可思議之險象、已隱現出沒、致識微者概焉憂之。噫、豈此藥果不適於此病耶、抑徒藥不足以善其後耶。

以上の用例の抽出に当っては、必ずしも「病」と「医」をセットにしない、すなわちどちらか一方のメタファーを用いて論理を組み立てている言説も対象にしたが、それによってなおのこと梁啓超が本格的に政治活動、言論活動を開始して以降一貫して、日本との戦いに敗れたのち(1895年)の中国を病んだ状態と見なし、またその認識を多くの人々に訴え続けていたことが判る。中国は、梁によって、腫れ物(=「癰病」—3、「疽」—4)、喉のつかえ(=「噎膈」—7)、胸のつかえ(=「痞」—8)、リュウマチ(=「痹癘」—9)、肺結核(=「癆病」—13)といった諸々の病に苛まれ、また、それらが宿病(=「老病」、「廢疾」、「沈痾」、「痼疾」—1、14、19)と化した、憂い(=「忡病」—3)の種の尽きぬ、満身創痍(=「千瘡百孔」—16)の存在として表象され、ついには「世界第一病国」(13)とまでいい切られることとなる。

もちろん、中国のそのような状態が梁および多くの中国人達にとって望ましいものであるはずはなく、そこからの脱却が切望されることになる。「病」は治療されなければならない。中国が侵されている「病」は「良医」、「国手」(12、14)の診療を受け、「聖藥」、「良藥」(7、18)を施されることによって克服されることが期待されるのである。

また、こうした「病」と「医」(「藥」、「治療法」)の関係は、当然のことながら「病」の内容、性質によって「良医」の治療方針、治療方も「良藥」の処方も異なってくるはずである。「病」の元が言論機関(「報館」—2)、産業(「工芸」—5)の未発達であればその活性化を促すことが治療法となるだろうし、伝統思想・学術(「旧学」—4)や朝廷中枢の政治勢力(「西太后党之政府」—15)が中国を損なっているのであればそれを取り除かなければならないだろう。さらに、自国内に「良藥」がなければ海外にそれを求めることも必要になるのである(「盧梭」、「民約論」—12、17、19)。

このように梁啓超が「病」―「医」のメタファーを用いる場合、朝廷、中国が抱える問題点とその改善策を具体的に示すケースも多く、メタファーと具体的内容相互の関係性の分析自体が梁の思想活動の理解するためのひとつの鍵となる可能性を持っているといえる（例えば、梁のルソー評価の変化³は、「病」―「医」のメタファーの用い方の変化にも反映されている―12、17と19の違いに注目）が、いまはそのことには触れず、梁とメタファーの関係、すなわち梁が何故自身の言論活動の開始当初からこのメタファーを頻繁に利用することになったのかという点に注目して論を進めてゆきたい。それは、この点が、先に言及した中国近代を代表する蔑称／自称のひとつである「東亜病夫」の流行現象の背景を明らかにすることにも繋がるからである。

3、メタ・メタファーとしての中国「身体政治学」

ここで改めて、中国が瀕した危機的状況の把握、説明に「病」―「医」のメタファーが有効性を発揮し得る条件を考えてみよう。国や社会、政治状況が「病」に冒された存在と見なされているということは、その前提として国や社会、政治を生き物、さらにいえば人間に擬えて理解する思考方法が成立していることを前提とするものだろう。つまり、国や社会、政治の擬人化、身体化ということであるが、それはまた9の「蓋国也者積民而成者也……如人身合五官百骸而成」や13の「医一身且然、而況医一国者乎」だけではなく同時期の梁の言説のなかに以下のように随所に確認することができる。

20. 『説群』序 1896年5月17日『知新報』第18冊

苟諸原質各無愛力、將地球之大為物僅六十四種、而世界靡自而立矣。……人之一身、耳司聽、目司視、口司言、手足司動、骨司植、筋司絡、肺司呼吸、胃司食、心司變血、脈管司運血、回血、腦司覺、各儲其能、各效其力、身之群也。

21. 「瓜分危言」 1899年5月20日～8月6日『清議報』第15冊～17冊、23冊

第三章 第六節

一国猶一身也、一身之中、有腹心焉、有骨節焉、有肌肉焉、有脈絡焉、有手足焉、有咽喉焉、有皮毛焉。鐵路者、国之絡脈也、磁務者、国之骨節也、財政者、国之肌肉也、兵者、国之手足也、港灣要地者、国之咽喉也、而土地者、国之皮毛也。今者脈絡已被瓜分矣、骨節已被瓜分矣、肌肉已被瓜分矣、手足已被瓜分矣、咽喉已被瓜分矣、而僅余外觀之皮毛、以裹此七尺之軀、安得謂為完人也哉。而彼蚩蚩鼾睡者猶曰、西人無瓜分之志、無瓜分之事。何其夢歟。

第四章

孟子曰、国必自伐、然後人伐之。亡印度者之酋長也、非英人也、亡波蘭者、波蘭之貴族也、非俄、普、奧也。譬之人身、使元氣內充、膚革外盈、風寒妖邪、孰得而侵之、其有遇魑魅感疾癘者、必其內先有以自召之者也。

22. 「少年中国説」 1900年2月10日『清議報』第35冊

夫古昔之中国者、雖有国之名、而未成国之形也。或為家族之国、或為酋長之国、……雖種類不一、要之其於国家之體質也、有其一部而缺其一部。正如嬰兒自胚胎以迄成童、其身体之一二官支、先行長成、此外則全体雖粗具、然未能得其用也。

23.「中国積弱溯源論」 1900年4月29日～7月6日『清議報』第77冊～84冊

第一章 第二節 積弱之源於風俗者

二曰愚昧。凡人之所以為人者、不徒眼耳鼻舌手足臟腑血脈而已、而尤必有司覺職之腦筋焉。使四肢五官具備、而無腦筋、猶不得謂之人也。惟国亦然。既有国形、復有国腦、腦之不具、形為虛存。国腦者何、則国民之智慧是已。……集全国民之良腦而成一国腦、則国於以富、於以強、反是則日以貧、日以弱。国腦之不能離民智而獨成、猶国體之不能離民體而獨立也。

24.「立憲法議」 (1900年作) 1901年6月7日『清議報』第81冊

問者曰、然則中国今日遂可行立憲政体乎。曰、是不能、立憲政体者、必民智稍開而後能行之。日本維新在明治初元、而憲法實施在二十年後、此其証也。中国最速亦須十年或十五年、始可以語於此。問者曰、今日既不可遽行、而子汲汲然論之何也。曰、行之在十年以後、則定之當在十年以前、夫一国猶一身也、人之初就學也、必先定吾將來欲執何業、然後一切學識、一切材料、皆儲之為此業之用。

25.「国家思想變遷異同論」 1901年10月12日、22日『清議報』第94冊、95冊

十九世紀之帝國主義與十八世紀前之帝國主義、其外形雖混似、其實質則大殊、何也。昔之政府、以一君主為主体、故其帝國者、獨夫帝國也。今之政府、以全国民為主体、故其帝國者、民族帝國也。凡国而未經過民族主義之階級者、不得謂之為国。譬諸人然、民族主義者、自胚胎以至成童所必不可缺之材料也。由民族主義而變為民族帝國主義、則成人以後謀生建業所當有事也。

26.「新民說」

第一節 叙論 1902年2月8日『新民叢報』第1号

国也者、積民而成、国之有民、猶身之有四肢、五臟、筋脈、血輪也。未有四肢已斷、五臟已瘵、筋脈已傷、血輪已涸、而身猶能存者。則亦未有其民愚陋、怯弱、渙散、混濁、而国猶能立者、故欲其身之長生久視、則攝生之術不可不明。欲其国之安富尊榮、則新民之道不可不講。

第八節 論權利思想 1902年4月22日『新民叢報』第6号

夫人之有四肢五臟也、是形而下生存之要件也、使內而或肝或肺、外而或指或趾、其有一不適者、孰不感苦痛而急思療治之。夫肢臟之苦痛、是即其內機閏失和之徵也、是即其機閏有被侵焉之徵也、而療治者、即所以防禦此侵害以自保也。形而上者之侵害亦有然。有權利思想者、一遇侵壓、則其苦痛之感情、直刺焉激焉、動機一撥而不能自制、亟亟焉謀抵抗之以復其本來。夫肢臟受侵害而不覺苦痛者、必其麻木不仁者也、權利受侵害而不覺苦痛、則又奚損焉、故無權利思想者、雖謂之麻木不仁可也。

27.「論政府与人民之權限」 1902年3月10日『新民叢報』第3号

政府之正鵠不變者也、至其權限則隨民族文野之差而變。變而務適合於其時之正鵠。譬諸父兄之於子弟、以導之使成完人為正鵠。當其孩幼也、父兄之權限極大、一言一動、一飲一食、皆干涉之。……使在弱冠強仕之年、而父母猶待以乳哺孩抱時之資格、一一干涉、則於其子弟成立之前途、必有大害。夫人而知矣、國民亦然。

これらの言説を通覧すれば、21、24 にいう「一国猶一身也」を極めて明瞭な典型として、梁啓超がいかに国や社会、政治を語る際（21 のインドやポーランドのようにそれが中国に限定されないことにも注意）に身体のアナロジー（20、23、25、26）やひとりの人間の成長過程との比較（22、24、25、27）を利用し続けていたかが理解できるだろう。こうしたいわばメタ・メタファーの存在に応じて梁の「病」―「医」のメタファーが多用されていた訳である。そして、この関係が梁一個人の脳裏においてのみ浮んだものではないこともただちに想像されることになるだろう。なぜなら、梁がその言論活動において中国の危機的状況を繰り返し「病」―「医」のメタファーを用いて表現したということは、それが言論「活動」において有効な表現方法であったからに他ならず、それは取りも直さず広範なる彼の言論活動の対象者においてもそうしたメタファーが共有されていたことを物語るものであるからである。例えば『旧唐書』巻 150 や『資治通鑑』巻 210 に見える「国猶身也」という表現はそのことを強く示唆する一例であるが、より幅広くそうした共有現象を確認しようとする時、手助けとなるのが近年相次いで発表されている中国における「身体政治学」をテーマとした研究である⁴。「身体政治学」とは、M・フーコーの「Body Politics」の考え方を導き手としつつ、西洋思想と比較した際に特徴的に見出される中国思想の「身体中心主義思想」の分析によって明らかになる中国思想文化上の身体と政治の関係に関する研究である。それらの研究が、伝統的中国思想において歴代展開されてきた「身国合一論」を『尚書』、『左伝』、『孟子』、『荀子』、『管子』、『礼記』、『淮南子』……といった典籍に見える具体的記述に触れながら検証していることによって、我々は古代より一貫して中国人の国や社会、政治に対する理解、アプローチの方法のひとつにそれを身体のアナロジーとして捉える考え方が根強く存在し続たことを知り得るのである。さらに加えて、研究の一部はそうしたアナロジーをメタ・メタファーとして形成される「病」―「医」のメタファーの存在と思想文化上の機能を「政治治癒論」や「治国如治身」という名称を与えて採り上げてきている。要するに、中国の危機的現状を「病める国」として表象し続けた梁啓超には少なくとも政治思想的修辞文化上の伝統に法するという十分な根拠、理由があったのである（梁は、時に周、湯王の臣、伊尹の言葉を利用する形で「病」―「医」のメタファーの使用に古典的根拠を与えている[『変法通議』自序の「伊尹曰、用其新、去其旧、病乃不存」および 6] 場合もある）。

4、梁啓超と「東亜病夫」

以上これまで進めてきた論述によって、梁啓超がその言論活動において「病」―「医」のメタファーを頻繁に使用していたという現象面を理解するうえでの少なくともひとつの解釈を提示することできた。そして、この解釈を踏まえることによって、1 節および 2 節で述べ置いた中国人達の間における「東亜病夫」の流行の理由もより理解し易いものとな

ることだろう。

ここで、改めて、梁啓超の言説における「(東亞) 病夫」の使用状況を確認することしよう。

28. 「変法通議」

論変法不知本原之害 1896年8月29日『時務報』第3冊

去歲李相国使欧洲、問治國之道於德故相俾士麦。俾士麦曰、我德所以強、練兵而已。今中国之大、患在兵少而不練、船械窳而乏也。若留意於此二者、中国不足強也。……彼西人之練兵也、其猶壯士之披甲冑而執戈鋌也。若今日之中国、則病夫也、不務治病而務壯士之所行。

29. 「医学善会叙」 1897年9月7日『時務報』第38冊

南皮先生序不繼足会、窮極流弊、乃曰数十百年以後、吾華之民、幾何不馴致人人為病夫、家家有侏儒、尽受殊方異族之蹂躪魚肉、而不能与較也。

30. 「『俄土戰紀』叙」 1898年1月22日『時務報』第51冊

西歐人恒言曰、東方有病夫之國二、中国与土耳其是也。……今者欧洲諸雄、方並心注力於中国。無暇以余力及區區之土、而土遂獲全焉。嗚呼、与土同病者、其危可知矣。而況於倚強盜以作腹心、引餓虎以同寢食、而尚欲以苟延旦夕、為小朝廷者乎。

31. 「瓜分危言」 1899年5月20日～8月6日『清議報』第15冊～17冊、23冊 第二章

中東戰事以後、中国之内情、一旦敗露、西人昔雖呼中国為病夫、而不知其病人膏肓至此極也、自遼台既割、二万万償款既納、而欧洲輿論大變、各側目重足、以經略東方之事、遂有河出孟津一瀉千里之勢。故四年以来、事故之多、視前此四十年間、過之數倍、馴致列強之勢力、全集於東方、欧洲之戰場、忽移於亞境。

32. 「中国積弱溯源論」 1900年4月29日～7月6日『清議報』第77冊～84冊

第一章 第四節 積弱之源於近事者

俄国自彼得以後、日盛月強、馴至今日為世界第一雄邦。中国自康熙以後、日腐月敗、馴至今日、為世界第一病國。

33. 「立憲法議」 (1900年作) 1901年6月7日『清議報』第81冊

抑今日之世界、實專制、立憲兩政体新陳嬗代之時也。按之公理、凡兩種反比例之事物相嬗代、必有爭、爭則旧者必敗而新者必勝、故地球各国、必一切同歸於立憲而後已。……距今五十年、頃而全歐皆立憲矣。尚余一土耳其、則各国目之為病夫、日思豆剖而瓜分之者也。

34. 「新民說」

第十七節 論尚武 1903年3月27日、4月11日『新民叢報』第28号、29号

我以病夫聞於世界、手足癱瘓、已尽失防護之機能、東西諸國、莫不磨刀霍霍、内向而魚肉

我矣。……二十世紀競争之場、寧復有支那人種立足之地哉。

歐洲諸國、靡不汲汲從事於體育。……其人皆病夫、其國安得不為病國也。……生存競争、優勝劣敗、吾望我同胞練其筋骨、習於勇力、無奄然頹憊以坐廢也。

以上の諸用例（抽出に当っては、「病夫」の集合体としてイメージされている「病國」も改めて含めた—32、34）からは、梁が「病夫」という言葉を手に入れて以降、間断なくそれをみずからの言説のなかで使い続けていたことが判る。いま、「手に入れて以降」という表現を用いたのは、本稿冒頭部において指摘したように、「（東亜）病夫」とは、もともと他者によって中国に加えられた呼称（蔑称）だったからである（梁もそのことについては繰り返し指摘している—30、31）。『万国公報』に載った翻訳記事でいち早く「病夫」というみずからと同胞に対する蔑みの表現を知ったと思われる⁸梁が、それを言論活動において執拗に使い続けた理由を考える時、それを彼の自虐、諦念の意識の現われに求めてはならない。なぜなら、梁にとっての「病夫」や「病國」はやがて健康体へ回復する可能性を秘めた存在だったからである。その可能性とは、中国を「病夫」と名指す列強諸国の世界支配の理論（＝進化論）によって保証される（34）だけでなく、そもそも根源的に中国の思想文化において太古より綿々と確認され続けてきた強固さを持ったものであった。「病夫」は、梁によって政治思想上強い戦略的意味を見出されて使用され続けた呼称だったのである。

まさに「病夫」が「病夫」によって見事に顛倒させられる。これこそが中国近代における「東亜病夫」流行の究極的な理由であり、そのことに最も早く気が付き、それを強く主張し続けたのが（それゆえ「病」—「医」のメタファーを強調することにもなった）のが梁啓超だったのである。

以上、本稿においては、主に梁啓超の言論活動を利用して、中国近代を語る際に常用される印象深い言葉「東亜病夫」の思想文化的含意を再検討してきた。当然この作業は、今後、梁以外の中国人、外国人の言説においても繰り返される必要がある。また「東亜病夫」以外の「睡獅」、「少年中国（老大帝国）」、「三等国」等といった言葉、表現に関してもその思想文化的含意の再検討は必要であろう（前稿参照）が、これらの課題に関しては稿を改めることにしたい。

注

1. 遊佐 徹「近代中国の自画像 序説——「睡獅」、「東亜病夫」、「少年中国」、「三等国」」（『岡山大学文学部紀要』第53号 2010年）。
2. 楊瑞松「想像民族恥辱：近代中国思想文化史上的「東亜病夫」」（『国立政治大学歴史学報』第23期 2005年）。
3. 土屋英雄「梁啓超の「西洋」摂取と権利・自由論」（狭間直樹編『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』[みすず書房 1999年 東京]所収）。
4. それらは、以下のような研究である。

張頌之「中国伝統政治諸喩論」（『孔子研究』2000年第6期）。

張再林「作為“身体政治”的中国古代哲学」(『人文雜誌』2005年第2期)。

蕭延中「“身体”:中国政治思想建構的認知基礎」(『中国人民大学學報』2005年第6期)。

蕭延中「中国伝統思惟中の“身体政治症候学”」(『華中師範大學學報(人文社会科学版)』2006年第3期)。

張再林「中国古代身体政治学發微」(『學術月刊』2008年第4期)。

5. 注2の研究内容に基づく推定。